

めにみえぬものたち



第五話 父という狂気 後編

文 村上大樹

絵 村上由然芽 村上大樹

父はすべてを疑うようになった。

恐怖に取り憑かれて、怯えていた。

めにみえぬものたちが、この家を狙っている。

「K 子は元 CIA じゃったんじゃ！そうか解ったぞ！」

「あいつがハッカーじゃったとは！」

「この家に盗聴器が仕掛けられとるんじゃ！」

インターネットは解約した。

父に盗聴器を発見する機械を買ってくれと頼まれた。

そして、インターネットで見つけた発見器を

注文して実家に発送してもらった。

父は早速、この発見器を試してみた。

発見器は「ピー、ピー！」と家中で鳴った。

この家には盗聴器が仕掛けられている....

松子さんの感覚も狂い始めていた。

もう、何が本当かも解らなくなっていた。

もしかしたら、わたしが間違えているのかも。

父の言うことが正しいのかも知れない。

鈴子さんも息子の奇行を黙って眺めていた。

いつの間にか家族は父の中にできた世界の住人になろうとしていた。

欲望と恐怖に囲まれた世界の住人に。

そこには恐怖に取り憑かれた怪物たちが、
わさわさと蠢いている。



盗聴器は誰が仕掛けたのだろう。

島中の人たちが疑いの対象になった。

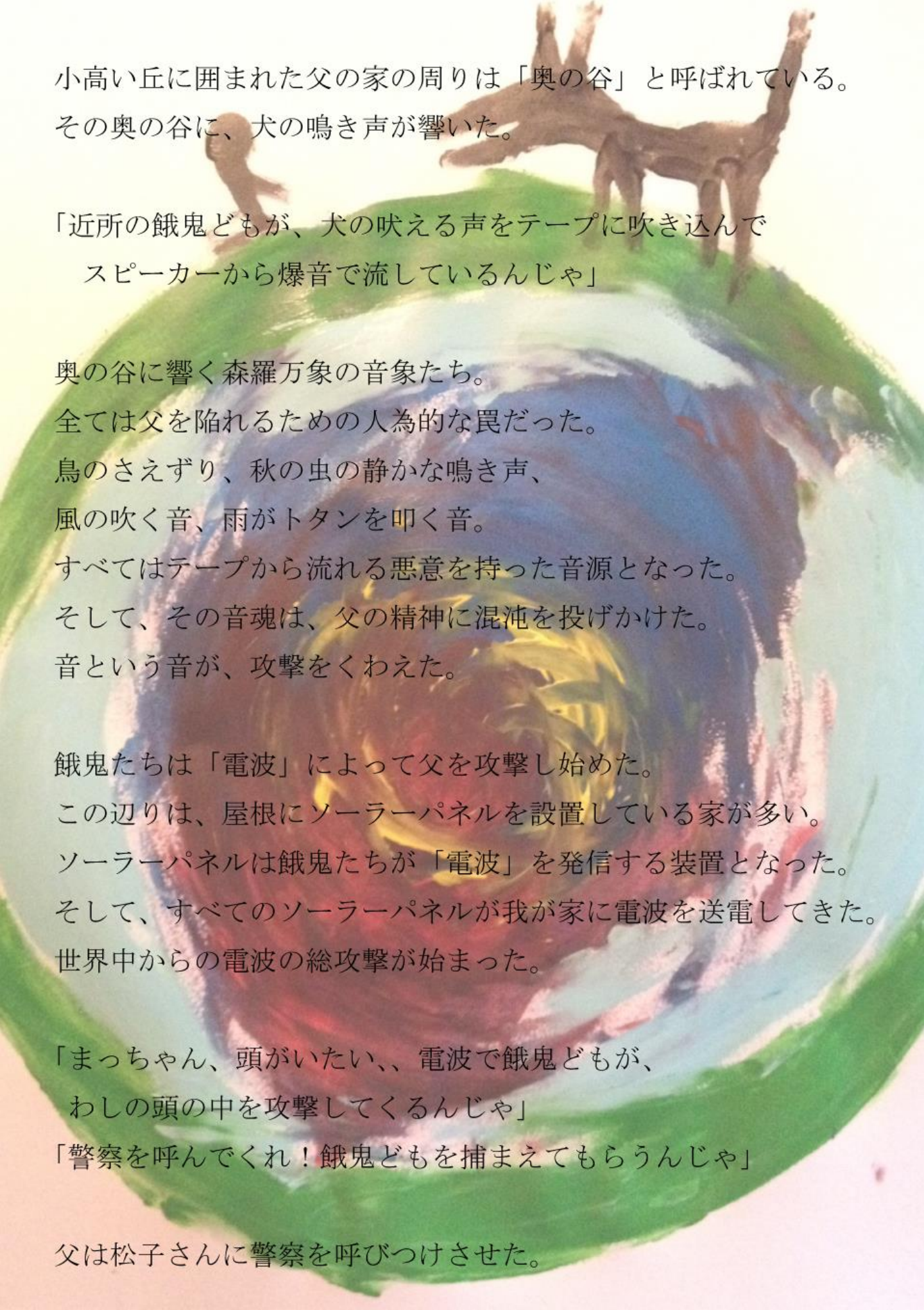
やつらが、自分たちの家にある膨大な隠し財産を狙っている。

「金に取り憑かれた餓鬼どもが、わしらを狙ってるんじゃ」

餓鬼たちは父の中にできた世界に住みついた。

彼らは意地悪が大好きだった。

そして父に嫌がらせをした。



小高い丘に囲まれた父の家の周りは「奥の谷」と呼ばれている。
その奥の谷に、犬の鳴き声が響いた。

「近所の餓鬼どもが、犬の吠える声をテープに吹き込んで
スピーカーから爆音で流しているんじゃ」

奥の谷に響く森羅万象の音象たち。
全ては父を陥れるための人為的な罠だった。
鳥のさえずり、秋の虫の静かな鳴き声、
風の吹く音、雨がトタンを叩く音。
すべてはテープから流れる悪意を持った音源となった。
そして、その音魂は、父の精神に混沌を投げかけた。
音という音が、攻撃をくわえた。

餓鬼たちは「電波」によって父を攻撃し始めた。
この辺りは、屋根にソーラーパネルを設置している家が多い。
ソーラーパネルは餓鬼たちが「電波」を発信する装置となった。
そして、すべてのソーラーパネルが我が家に電波を送電してきた。
世界中からの電波の総攻撃が始まった。

「まっちゃん、頭がいたい、、電波で餓鬼どもが、
わしの頭の中を攻撃してくるんじゃ」
「警察を呼んでくれ！餓鬼どもを捕まえてもらうんじゃ」

父は松子さんに警察を呼びつけさせた。

「わしらの家には闇金の財産がある」

「家族の命が狙われとるんじゃ」

「お前ら警察は、泥棒三兄弟を捕まえろ！」

「島中の餓鬼どもが、わしらに電波で攻撃してくるんじゃ！」

警察官は真剣に父の話を聞いていた。

その後、松子さんをそっと呼びだした。

「警察では、ご主人を救うことはできません」

「これから大変だと思いますが、

奥さんがしっかりとした意思も持って、

ご主人を見守ってあげてください」



そう警察官から言われた。

松子さんの意識は、非現実の世界から、目をさました。

やはり、主人はおかしい。

やっと、松子さんの感覚は、

父の作りだした世界から抜けだせた。

わたしが主人を何とかしなければと強く思った。

「ここにいたら電波に殺されるんじゃ！」

父はついに家から逃げだした。

そして松子さんが以前に住んでいた空き家へ向かった。

呪われた餓鬼たちの声が聴こえてくる。

「うるさい！静かにしてくれ」

父は頭を抱えて唸っている。

「この空き家も、まずいんじゃ！ここは餓鬼どもの住処じゃ」

父は再び自分の家に帰った。

家族は、父に振り回されて疲れ果てていた。

父は、松子さんに、電波と餓鬼の見張り番を縁側でさせていた。

松子さんは、うとうと、としていて眠りかかっていた。

目を閉じた松子さんに、父が近づいて来た。

「お前も、わしに電波を送ってる餓鬼じゃろう？

この家から出ていけっ」

小さな声で父はそう言った。

ついに父は、松子さんも信頼できなくなっていた。

松子さんも、この異様な暮らしに堪えきれなくなっていた。

どこか遠いところに行ってしまう。

父が寝ている隙に、荷物をまとめて家を飛び出した。

真夜中の暗闇から、空が、朝の色に変わろうとしている。
まだ薄暗い、深い青色が、町並みを染める。
そんな、早朝の道を歩いた。
静かで凜とした空気の中。
松子さんは、落ち着きを取戻していた。

「いま私がでていったら、夫は完全に狂人になってしまう」

このままではいけない。もう一度、家に戻って、
父を狂った世界から救いださなければ。

「電波を遮断するカーテンを買ってくれっ！！」父は叫んだ。

「大樹に電話しましょう。

この島で電波を遮断するカーテンは売っていないので
東京で買ってもらいましょう」

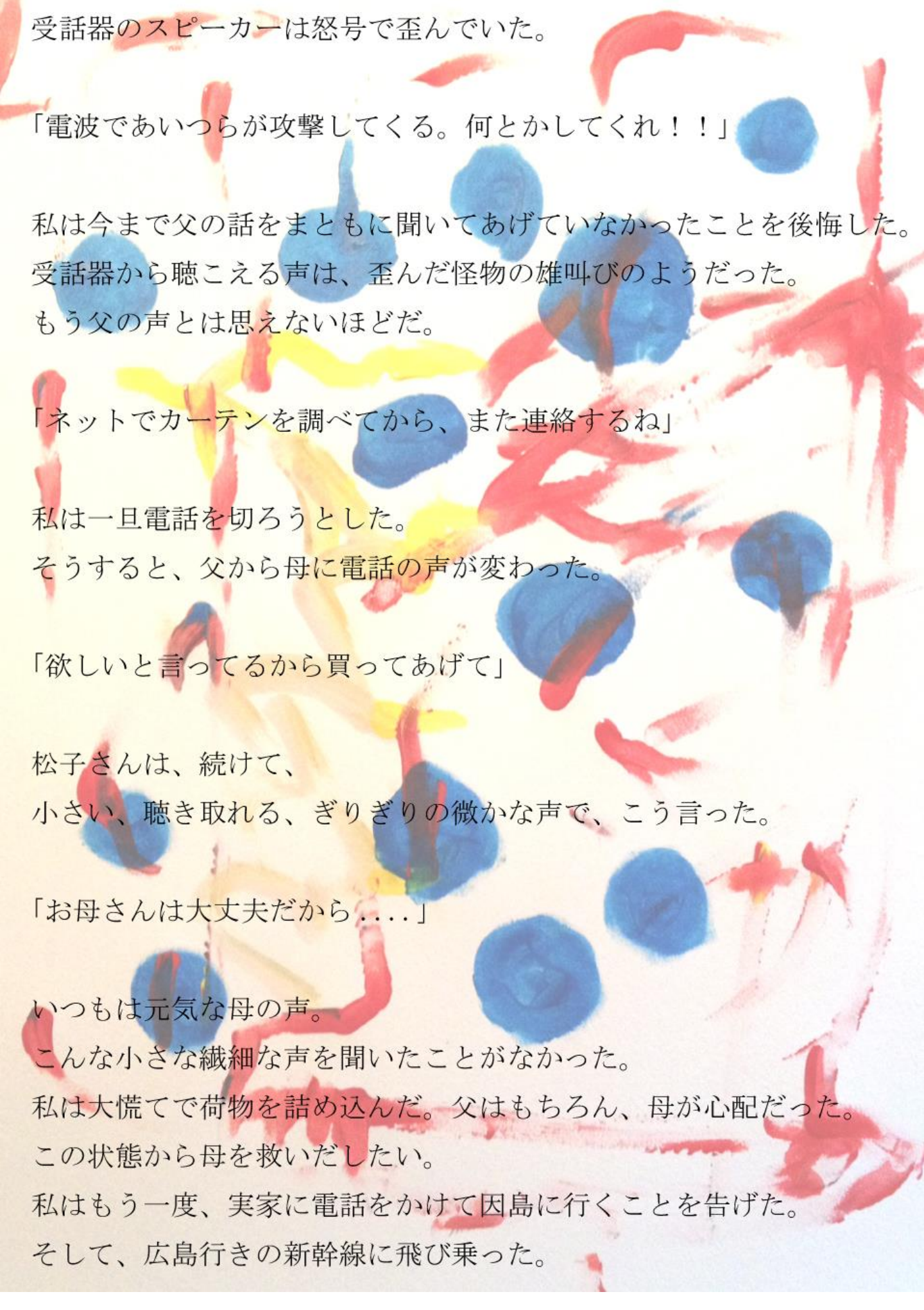
松子さんはそう言った。



東京に住んでいた私のもとに、
因島に住む父から電話がかかって来た。
そして大きく怒鳴るような声でこう言った。

「やつらが嫌がらせで電波を送ってくるんじゃ。

電波をよけるカーテンを買ってくれ！！」



受話器のスピーカーは怒号で歪んでいた。

「電波であいつらが攻撃してくる。何とかしてくれ！！」

私は今まで父の話をまともに聞いてあげていなかったことを後悔した。
受話器から聴こえる声は、歪んだ怪物の雄叫びのようだった。
もう父の声とは思えないほどだ。

「ネットでカーテンを調べてから、また連絡するね」

私は一旦電話を切ろうとした。
そうすると、父から母に電話の声が変わった。

「欲しいと言ってるから買ってあげて」

松子さんは、続けて、
小さい、聴き取れる、ぎりぎりの微かな声で、こう言った。

「お母さんは大丈夫だから……」

いつもは元気な母の声。

こんな小さな繊細な声を聞いたことがなかった。

私は大慌てで荷物を詰め込んだ。父はもちろん、母が心配だった。
この状態から母を救いたしたい。

私はもう一度、実家に電話をかけて因島に行くことを告げた。
そして、広島行きの新幹線に飛び乗った。

尾道駅に着いた。改札をでると父の姿があった。

一人で迎えに来てくれていた。

目は少し沈んでいたが、穏やかな表情をしていた。

私は、少し拍子抜けをした。

もう怪物でも、社会の精霊でもない。

いままでに見たことのない、穏やかな父との再会だった。

「何だか気持ちが落ち着いたんじゃない。

大ちゃんが心配して来てくれるって言ったから」



車中で父は語った。

会社から見放されて、非現実の世界に幽閉されてしまったこと。

兄弟との関係も不協和音なこと。

息子たちにも見放されていた気持ちになっていたこと。

たった一人で、生きているような気がしていた。

壮絶な電波との戦いの中を。

私が来たこと。

それだけで、自分は一人ではないと、父は思えたのかも知れない。

私は何も意見はせず黙って父の話を聞いた。

そして私は父に、一つだけお願いをした。

どんなことがあっても、松子さんを一番大事にして欲しいと。



車窓から見える海は、穏やかだった。

海面は、太陽が反射して、

無数の光が、生きものののように、煌めいている。

父の頬には、一筋の涙が流れていた。



昨日の夜まで、この家は、怪物がいる狂気の世界だった。
そんな気配が、家の中の片隅で、まだ蠢いているようだった。
この気配の影を潜めてもらいたい。
私は、気持ちに、言霊を込めた。
影が消えるように、祈りを込めて。

父に起きた異変を家族と一緒に考える。
そんな新たな家族コミュニケーションが始まった。
それはとても不思議な感触だった。
父が庭に、落とし穴を掘った話。
その落とし穴に、父が落ちてしまった話とか。
珍妙な話ばかりだった。
しかし、家族の食卓は、笑顔と、団欒で彩られていた。
そういえば、私たちには、家族で食卓を囲んだ記憶が殆どない。
父はいつも忙しく働き会社に居たから。
奇しくも新たな形で家族の食卓が再生しようとしていた。

私は農業日誌を何度も見た。
だけど、どう見ても、畑の肥料代を書いた、ただのメモだった。
やはり、この家に隠し財産はないだろう。
盗聴を発見する機械は、
父の家だけでなくどこに向けてもピーと鳴った。
廉価なものであったので、不良品だったようだ。
犬の吠える声は録音ではない。悪戯でもない。
電波は父を攻撃はしない。
父は自分の拡張した精神のことを少し理解し始めていた。

「わしは病院に行きたくないんじゃ」



父がそう言うので、

しばらく東京の私の家にいてもいいよと言った。

もっと、ゆっくり父の話を聞いてあげたかった。

松子さんにも休息が必要だろう。

父は一週間ほど東京にいた。

学生時代に通っていた大学への通学路を一緒に歩いた。

四十年前とはすっかり変わってしまった東京の景色。

父の歩く姿は現在の町並みには、いないようだった。

思い出の中の景色を何とか蘇らそうとしているようだ。

若き日の父は、どんな空気の中を生きていたのだろう。

「わしは、あの頃、何を考えてたんじゃろう？」

父には幼年期から青年期にかけての記憶が全くない。

身体に存在する記憶は、会社で働いていた日々だけだ。

青春時代の若気の至りや、

少年の頃に島の中で、かくれんぼしたような楽しい記憶もない。

幸せなはずの家族の食卓の記憶も。



「わしは、何であんなに、

がむしゃらに会社で働いてたんじゃろう」

渋谷のスクランブル交差点。

行き交う人々の群れ。

父は、歩く人たちを見ながら言った。

信号は青く点滅する。

すると数千人もの人々が一斉に歩道を横断する。

父は自分の内側の奥深くを覗くように、その光景を眺めている。

かつて、自分が社会の精霊だったことを見つめるように。

歩く人たちは、幻のように、何かに向かって、この道を歩いている。

今日も、社会を守る精霊たちは、人間の姿をして、

この道を交差している。

喫茶店の窓から、その景色を父は、じっと眺めていた。

その姿は、怪物でもなく、精霊でもなく、一人の迷える男だった。

父は、精霊という超自然的な存在から「人間」に

なろうとしているのかも知れない。

人間はどこに向かって歩いていくのだろうか。

人間の精神は拡張する。

どこまでも、どこまでも。

身体に広がるの内なる世界は、荘厳とした自然の一部である。

内側の空間は、万物の自然、宇宙や、

その先ある真理へと広がっていく。

そして、精神の拡張は、時に哲学や、

宗教、音楽、立体、絵、詩、映像の化身となり、

とてつもない創造物を産みだすことがある。



それらは文化と呼ばれ、真理は、文の化身となる。
文の化身は、人間を動かす、大きな力を宿している。
その力が、文化や、芸術を観る者の心も豊かにする。
しかし、真理の創造は、狂った世界と、
紙一重のところで存在している。
人間は、あまりにも弱い。



だから、真理に対峙した時に、
危うい力のコントロールを失ってしまう。
もちろん、父には操作ができなかった。
そして、真理のふりをした怪物にハンドルをゆだねてしまった。

沖縄に太古から受け継がれるシャーマンという存在がいる。
シャーマンとは超自然的な存在と、
交信する能力をもった職能者である。

自然の中に宿る精霊たちの声に耳を傾ける。
シャーマンはその声から未来を予感する。



そして、共同体を進むべき道へと導いてくれる。

沖縄のシャーマンには、修練の期間があるそうだ。



その時に、大抵の人は、体調や心に異変が起こる。

容態は悪くなり、精神も不安定になる。

寝たきりになり、数ヶ月も寝込む者がいる。

精霊と交信できる能力は、精神が分裂した状態で生まれる。

それは、現代でいう所の統合失調症に、近い状態なのかも知れない。

やがで、修練者は、精神をコントロールできるようになる。

分裂から安定した心へと自由自在に。

ある時は、森羅万象に宿る靈魂の声を聴き。
ある時は、共同体を俯瞰して見つめる政策者となる。
自身の精神を操縦してバランスを保つ。
それをできる者が、シャーマンという職能者になるのだ。

すべての人がシャーマンのようになる必要はない。
しかし、誰にでも、
精神を安定させる平衡が、あると感じている。
それぞれの身体の内側にあるバランス。
自分が楽しい、疲れない、豊かになれるバランス。
隣にいてくれる人と大切に時間を過ごせる平衡が。
家族という小さな共同体について思考すること、
実践すること。共生すること。
父は、東京の街を見つめながら、
初めて家族や松子さんのことを考えた。
会社の利益や、闇金のことではない、家族のことを。
そして、父は因島に帰った。

松子さんはじつくりと父に寄りそった。
暖かく見守ってくれる人がずっと隣にいる。
それは父の支えとなった。
父がおかしなことを言い始めると、優しく諭した。
何度も、何度も。



そして、松子さんは、この状況を、
過酷な介護だとは、思わなかった。
むしろ、状況を楽しんでいるようにも、見えた。
自分が巻き込まれてしまった状況を楽しむ。
松子さんは、そんな強い平衡を持ち始めた。
父の行動を、そっと見つめて、考える。
ファールが、昆虫を、
優しい視線で、見つめたように、観察した。

そして、観察した結果を生活に取り入れた。
父が、部屋を片付け始めると、
精神が不安定になる前の合図だと発見した。
満月や、芽吹きの子供になる前にも、精神に変調は訪れた。
そのことを、父に、丁寧に伝えた。
病気だから、対話を諦めたり、放置せずに、
人間として、対等に向き合った。
松子さんが発見した、心が起こす、
奇妙な行動への道筋について、何度も、父と話し合った。

少しずつではあるが、父は、自分の心と向き合い、理解し始めた。
松子さんは、病院に行かせず、薬も飲ませずに、
粘り強く、父と付き合った。



私の母の松子さんには、何度も思い出すことがある。
それは、会社で忙しく働く前の、父の姿だ。
その頃の父は、穏やかで、優しかったそうだ。
まだ幼い子どもだった私と、お風呂に入ったり、
公園で遊んだり、夫婦の中にも、ちゃんと会話が合った。
それは、家族のとても幸せな時間だった。

しかし、それは束の間の幸福だった。
八十年代に入って、社会が、幻のような景気に活気づく頃。
父は、会社の仕事へと、魂を埋没させようとしていた。

「会社で営業成績を競い合うようになってから、
お父さんは変わったわ」

優しく穏やかだった父の姿は、序々に変化していった。
父の体の中で、狂気は芽をだす準備をずっとしていた。
父は何か、苛立ち、闘争本能の塊のような人間になっていった。
社会という土壌には、そこらじゅうに、狂気の種が、潜んでいる。



松子さんは、畑で野菜をつくって欲しいと、父に提案した。
父にできた空白の時間を豊かにするために。
松子さんは料理が好きだった。
もっと新鮮な食材があると、さらに料理が楽しくなる。
そう言う、父は喜んで畑の仕事を始めた。
自分が求められていることに喜びを感じた。
会社時代とは違う、家族のための仕事できた。
父は、土と草に、ふれた。



父に電波が見えた日々から、十年がたつ。
いまでは、私も因島に住んでいる。
父たちが夫婦で住んでいる家のほど近くに。
妻と、二歳になる娘と、私の弟との四人暮らし。
父は畑の仕事に精をだす。
皆に美味しい野菜を食べてもらうために。

植物を育てること、自然と戯れること。
農耕時代が始まった太古の昔から人間が
つづけている生活のための営み。
社会の精霊は、会社から抜けだして、畑の化身となる。
その姿はまるで、自然によって、人間が操られているようだ。
その昔、自然と人間は仲良しだった。
父の姿を見ていると、そう感じる。
精霊は、いまでも自然の中に宿っている。

「畑で野菜を育てるって、
お父さんにとってどういうことなの？」

ある日、野菜づくりで没頭する父に、
なんとなく質問してみる。
そうすると、こんな答えが返ってくる。

「自然の中に、詩を発見することじゃな」

私は耳を疑う。
クソ真面目で仕事一筋の父から、
こんな詩情がある言葉がでてくるとは。
そうか、父は詩人なのかも知れない。
詩人のように感性が敏感だから、
電波の粒子に、色彩や、言葉や、音を感じたのだろう。
父の身体の深いところにある感性が、自然の詩と響き合う。
そして畑の中に詩（うた）を発見する。
シャーマンが大地の声と、交信するように。



父は、病院にいけば、
統合失調症と診断されて、治療を受けていただろう。
稀な例かも知れないが、
一度も病院に通わずに、薬も飲まずに、精神を安定させている。

そして、父は、家族のために、野菜という詩を紡いでいる。
その詩の味は、父に似た、
感性が鋭い、深く重い、不思議な風味がする。

